

医心 伝心

COVID-19の現状と取り組み

富山県医師会副会長 村上美也子

新型コロナウイルス感染症患者は、3月下旬には富山県を含む全国で5県だけが患者発生ゼロの状態でしたが、5月初めには富山県内で200名を超える感染者数となり、人口10万人あたりの発生数は全国3番目となりました。県内では患者発生状況の各段階においての医療提供体制が検討され、医療崩壊にならないよう感染症指定病院、重点医療機関を設定し、患者数が多かった場合の医療体制のシミュレーションが行われていましたが、予想を遥かに超えるスピードで刻々と状況は悪化していきました。富山県新型コロナウイルス感染症対策協議会の下部組織であるワーキンググループでは、行政、感染症専門医、公的病院、関連団体の実務者が集まって病院の役割分担や病床確保、入院患者の転院など問題解決に向けて、医療圏を超えた連携が図られるよう協議を行っています。県医師会からも出席し、行政や医療機関等の円滑な連携と体制整備、今後の課題等を強く訴えております。

医療提供体制の逼迫を緩和するための軽症患者の施設療養は、感染症専門医等の助言を受けながら、富山市内で4月下旬から開始されました。常駐の看護師2名とオンコール医師1名、退所に向けて週3回のPCR検査が行われています。さらに5月には富山市・滑川市・中新川郡の3医師会合同の運営による富山医療圏PCRセンターが開所しました。これまではかかりつけ医からPCR検査にはなかなかたどり着けませんでしたでしたが、医師がPCR検査を必要と判断した場合に、センターに紹介し検査を受けられる体制が整います。現在軽症患者療養施設も地域外来・PCRセンターも郡市医師会の中で手上げされた先生がオンコールやPCR検査を担当されています。新型コロナウ

イルス感染症は長期にわたる戦いを覚悟しなければなりません。多くの皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

また全国的に新型コロナウイルス感染症患者に対応している医師・看護師をはじめとする医療従事者に対し、偏見や誹謗中傷が見られることは大変残念なことです。これは医療者など社会を支える人たちのモチベーションを下げ、疲弊させる大きな原因となり、医療崩壊という深刻な問題に直結することであり、断じて許されるものではありません。自らも大切な人がいる医療従事者が、感染のリスクを背負いながら日々緊張感に満ちた医療の現場で戦い続けるのは、その使命感からです。国民すべてがこの難敵からは逃れることはできません。日本医師会を中心に正しい知識と理解を求め、発信していくことが重要であると思います。

第1波がやや収束しつつあるように見える今、これまでの反省を踏まえて次の第2波に備えての対策を考える時です。介護崩壊は医療崩壊と表裏一体の関係であることを念頭において、介護施設内感染対策としての「持ち込み防止」「施設内発生を想定した対応」を柱としての体制整備を急がなくてはならないと思います。精神科医療、障がい者（児）への対応も急務です。喫緊の問題として、手術や分娩のために受診する患者の中にもコロナ陽性者が含まれることが危惧されます。今後、すべての患者が感染者である可能性を想定しつつ医療を行う必要があると考えております。山積するひとつひとつの課題に解決策を見出しながら、国難とも言える新型コロナウイルス感染症に対応していかなければなりません。医療や介護に携わるすべての方々の理解と実行が必要な時です。